



「決まり」の大切さ

次長 目崎 淳

今年度、私は4年生1学級の社会科の授業を受け持っています。6月は「健康なくらしとまちづくり」の学習の一つとして、家から出されるごみについて学びました。家からはどのようなごみが出されているのか。どのくらいのごみが出されているのか。そして、どのように捨てているのか。それらを各自で一週間調べてくることを、課題にしました。

一週間後、課題を提出する日がやってきました。そこで調べてきたことを発表しました。「生ごみは…」とか、「ペットボトルや空き缶は…」など、たくさん発表されました。例えば、本校に通う子は、私学という性質上、鎌倉市や横浜市、またはそれ以外の市や町にも住んでいますので、ごみの収集方法も居住する自治体によって異なる部分があります。大人にとってそれは当たり前であることも、子どもたちにとっては、今回の発表をとおして、新たな発見となりました。と同時に、疑問点も多く浮かび上がってきました。印象的だったのは、「自分の住んでいるところは、24時間365日捨てることのできるごみ集積所がある」という発表でした。ほとんどの子は、自分が調べてきたことと大きく異なる



(鎌倉市は「燃やすごみ」週2回収集)

な集積所なんて有り得ないのでは無いか?とも感じていたようです。しかし、発表した子のその後の説明を詳しく聞くにつれ、クラスの子たちは、その理由に納得することができました。そして、そのごみの捨て方にも「決まり」があるということに気づくことができました。(ここでは、その理由について割愛します)

4年生社会科の教科目標の一つに、次の一

文があります。「自分たちの都道府県の地理的環境の特色、地域の人々の健康と生活環境を支える働きや自然災害から地域の安全を守るための諸活動、地域の伝統と文化や地域の発展に尽くした先人の働きなどについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。」

(小学校学習指導要領 第2章 第2節 社会より)

今回の学習を通して「自分たちの住む地域の生活環境を支える働きについて理解する」「それらを理解する過程で、必要な情報を各自で収集する」ことができたと思います。ごみの捨て方には「決まり」があり、それをみんなが守っているから、日常生活が成り立っているということに気づけたのです。今回、4年生が学んだごみの捨て方も、謂わば当たり前のことの一つだと理解することができたわけでした。

右の写真は、西館丸玄関にある靴箱を、子どもたちが登校した後に撮影したものです。本校の靴箱は3段構成になっていて、上から「上履き」「運動靴」「(登下校用)黒靴」を収納する「決まり」になっています。どの靴も、かかとがそろっている様子がおわかりになると思います。試しに、別の日の同じ時刻にも靴箱の様子を確認しました。結果は予想どおり、上の写真と同じ状態でした。私が小学校の先生になりたての時、先輩から教わったことの一つが「ハキモノを脱いだら必ず『そろえ』、席を立ったら必ず『イスを入れる』子にする事」(原文より引用)でした。なぜそれが大事なことなのか。そのことを子どもたちに教えるコツはどんなことなのか。当時、先輩からその答えを聞くことは叶いませんでしたが、初等部生や自分の子にその「決まり」を教え続け、今となってはその答えが分かるような気がします。

